

一仏兩祖の教えを今に伝える

令和7年3月1日発行(毎年1.3.6.9月の1日発行) 第172号

曹洞禅グラフィック

SŌTŌZEN GRAPHICS

2025彼岸春号

No.172

特集

小栗上野介の真実

東善寺・村上泰賢老師をたずねて

[取材執筆・撮影] 柗 憩



痛みを

分かち合い

支え合う場

島 蘭 進

痛みを分かち合い支え合うことができるかどうかで、苦難に耐える力に大きな違いが出てくる。ひとりきり、あるいは少ない家族や仲間だけで苦難に耐えていくのは容易ではない。そこで苦しいとき、悲しいときには分かち合い支え合う場が必要になる。かつてはそのような場を身近に見出すことができた。血縁や地縁による助け合いが当たり前のように期待できたのだ。

一九五〇年代の終わり頃、私の母方の祖父が亡くなった。がん関係の医療に携わっていた医師の祖父だったので、病院で亡くなった。その頃は、病院に家族親族が常時付き添い、夜も泊まり込むことができた。家族親族が付き添うことができないときは、「付き添いさん」を雇用してケアをしてもらった時代だった。

委ねるのを推進する時期が続ぎ、病院で死ぬのがノーマルになった。だが、今度は死にゆく人を生活から引き離し、孤独に閉じ込めて送り出すのが適切なことかどうか、問い直されるようになった。高齢者だけでなく、分かち合い支え合いの場をもてずに亡くなっていく人が増えている。

死にゆく人も家族も死をしっかりと意識してその備えをしつつ死を迎えることが望ましい。それはホスピスや在宅のような環境の方がしやすいことなので、そのような方向性の模索が続いている。それは痛みを分かち合い支え合う場を取り戻すことでもあるはずだ。

また、死別を経験し、遺された人々も悲嘆を他の人々とともにできずに苦しむことが多くなっている。かつては、お通夜やお葬式に多くの血縁、地縁、その他の関係者が集うことが多かった。その後も、お盆やお正月、また命日などの法事や墓参りには多くの人が集まるのがふつうだった。痛みを分かち合い支え合う機会は、



「完全看護」という言葉が広まり、入院して長時間付き添うことができなくなったのは80年代のことではなかっただろうか。

70年代以降、病气や死にゆく過程は専門家に

宗教が大きな役割を果たすことが多かった。

現代人は以前のように、自然に痛みを分かち合い支え合う場が与えられると期待することができなくなっている。そこで、新たに痛みを分かち合い支え合う場を探し、形作る例が増えている。とくに孤立しやすい人はそうだ。

痛みを分かち合い支え合う場を提供して、一九八〇年代以降、急速に発展してきたのは自助グループだ。なかでもよく知られているのは、アルコール依存症の人たちが集うアルコールクス・アノニマス(AA)だ。同じ痛みを分かち合うことで立ち直っていく自助グループだが、そこでは「ハイヤーパワー」とか「自分なりに理解した神」に委ねることが勧められる。

かつて宗教が担っていたような役割が新しい形の集いに移動しているように見える。「同じ信仰や礼拝の形を共有する」のではなく、「同じ苦しみとそこから抜け出していく道筋を共有する」のだ。そこでスピリチュアルな経験が大きな役割を果たしている。



しまのすずむ

1948年生まれ。宗教学者。

東京大学大学院名誉教授。

上智大学神学部特任教授。同グリーンケア研究所所長。

専門は日本宗教史。

小栗上野介の真実

東善寺・村上泰賢老師をたずねて



幕末の激動の時代に立ち向かい、日本の未来を切り拓いた小栗上野介忠順。その志は横須賀造船所の設立をはじめとする偉業によって近代化の礎として刻まれた。志半ばで命を絶たれながらも、その精神は現代に脈々と息づいている。歴史の間に葬られた真実を、東善寺住職・村上泰賢老師の証言とともに紐解きます。

小栗の足跡で確かめる 明治以降の日本

群馬県高崎市中心地から国道四〇六号線を北上した山深い地区に曹洞宗・東善寺があります。緑豊かな土地で寺の背後には美しい竹林も広がっています。

ここは幕末期の幕臣・小栗上野介忠順の眠る寺です。小栗ゆかりの品々が保存されているほか、事前に依頼すれば、住



東善寺には、小栗に関わるさまざまな写真や資料ほか保存されている

職から小栗に関する詳細な話もうかがえ、寺で幕末を駆け抜けた異才に想いを馳せることができます。

小栗は一八六〇（万延元）年に遣米使節の旅から帰国し、その後八年の間に、横須賀造船所建設・洋式陸軍制度の採用と訓練・フランス語学校設立（横浜）・中小坂鉄山の開発（群馬県下仁田町）・日本最初の株式会社「兵庫商社」設立、築地ホテル館開業（江戸）・ガス灯設置・郵便電信制度の開設・新聞発行の提唱・鉄道建設の提唱・金札発行など金融経済の立て直し・森林保護の提唱などを次々に行い、日本の近代化を推し進めました。しかし、

名奉行・小栗上野介』で取り上げられ、その生涯に関心を持ち、全国から東善寺まで足を運ぶ人々は後を絶ちません。

小栗が目指した近代とはどんなものであったのか。彼の残した近代化遺産は大きく、その礎は、いまでも現代の日本社会の随所に散見されます。

造船所建設で 日本近代化へスタート

小栗は一八六〇年に遣米使節目付として米艦ポーハタン号にて米国へ。ホワイトハウスでブキャナン大統領と国書を交換したあと、ワシントン海軍造船所の見学で造船所の仕組みを理解しました。そこでは銑鉄を溶かしてあらゆる鉄製品を造っていました。まず蒸気機関そのもの、その蒸気や水を運ぶパイプ、パイプを繋ぐジョイント、シャフト、ネジやボルト、大砲や砲弾といったものから厨房の鍋・釜・ナイフ・フォーク、ドアノブ・バケツまで造っていました。船の帆布・ロープも造り、木工所では木造船体・床・天井・階段・壁すべて蒸気機関を駆使して造っていました。そしてそれらの部品を集めて「船も」造っていたのです。造船所という名の、何でも造る

の功績を伝え続ける東善寺住職・村上泰賢老師は語ります。東善寺から近い水沼河原の慰霊碑には「罪なくして斬らる」と刻まれています。「明治以来、小栗上野介は明治政府に抵抗しようとした主戦派として扱われてきたが、近年少しずつ、真の業績が認知されるようになってきた。小栗の足跡を語り継ぐことで、多くの人々が明治以来の薩長史観を見直す一助としたい」と村上老師。

歴史の波に翻弄され、教科書にその名を載せられない小栗ですが、二〇〇七年には、NHKドラマ『またも辞めたか亭主殿〜幕末の総合工場を見学したことになります。「日本を近代化するには、こういう総合工場・造船所建設からだ!」と小栗は確信しました。

小栗が残した 功績

二〇一〇年、村上住職は『小栗上野介忘れられた悲劇の幕臣』（平凡社新書）を著しました。そこには、小栗上野介忠順という、志を貫いたひとりの武士の生涯が描かれています。

「歴史の変遷の中で明治以来偏った評価を受け教科書に載せない小栗の真の功績を後世の人々に語り継いでいきたい」との思いから、村上住職は本書を執筆しました。住職はその他にもさまざまな著作物を発表しており、小栗の本当の姿を読み直す最適な資料が豊富です。

村上住職の著書をもとに、小栗の足跡を辿ってみましょう。

小栗忠順は、一八二七年に江戸の神田駿河台で、旗本の家系に生まれました。幼少期から聡明で学問に秀でていたとされ、後に幕府に仕官して活躍します。

一八六〇年には米国に派遣され、同地の先

進技術や文化に触れ、日本の近代化に対する強い関心を抱くようになりました。

「渡米中の品位ある立ち居振る舞い、身につけている衣装の美しさ、そして公正でタフな交渉力などに、米国要人たちは目を見張った。科学文明は遅れているが、小栗たち日本人は高い知性を持っていると評価されたようだ。」と村上老師。米国における使節団の立ち居振る舞いについては、本書に詳しく綴られています。

帰国後、小栗は「横須賀造船所」の建設を推進し、日本における造船技術の向上に尽力しました。この造船所は、メートル法をはじめとして、日曜休日制・月給制・年功給制・技能給制・複式簿記が定着した日本産業革命の地となり、日本の軍勢力・



東善寺の奥の美しい竹林を登った先に、ひっそりと小栗の墓がある

技術力を近代化させる上で非常に重要な役割を果たしたのです。

また株式会社設立の基礎を作り、日本初の株式会社「兵庫商社」や「築地ホテル館」などの設立に深く関与しました。ちなみに「コムペニー」(company)を「商社」と訳したのは小栗です。

また、近代的な貨幣制度の導入を進め、金融システムの改革にも取り組みました。彼は日本を近代国家として強化するための基盤整備に尽力したのです。

幕末の治世は、日本が激動の国際環境に直面し、変革を余儀なくされた時代。

一八五三年、米国のペリー艦隊が浦賀に來航、日米和親条約(一八五四年)を締結し、その後、一八五八年の日米修好通商条約により貿易が

開始され、日本は本格的に西洋との交流を進めました。

小栗は幕府の財政と経済改革の立役者として重要な役割を果たし、日本の近代化に尽力しました。彼は、強国に対抗するためには経済力と軍勢力の強化が必要と考え、積極的に外国の技術を取り入れました。

一方、国内では過激な「尊王攘夷」運動を掲げる倒幕の機運が高まります。一八六七年には、大政奉還により徳川慶喜は政権を朝廷に返上し、江戸幕府は事実上の終焉を迎えます。

幕府の要職にあった小栗は、幕末の動乱期において多くの敵対勢力から恐れられ、特に薩摩・長州の新政府軍からは、敵視されました。幕府が解散すると、彼の立場はさらに厳しいものとなりました。

一八六八(慶應四)年、小栗は幕府から帰農願を認められ、与えられた知行地であった権田村に家族ぐるみで移住しますが、薩長軍に捕らえられ、取り調べもなく斬首されました。享年四十二歳。

近年、村上老師らの情報発信などにより、その近代化政策や功績は再評価されつつあります。

新しい時代に問われる

日本人の心

村上老師の著書『小栗上野介』には、小栗はこんな言葉を残したと記されています。

「ある幕臣が『幕府の運命もなかなか難しい。これから費用をかけて造船所を作ってもできあがるころ幕府はどうなっているかわからない』と語ったところ、小栗は居ずまいを正し『幕府の運命に限りがあるとも、日本の運命には限りがない。幕府のしたことが長く日本のためとなつて徳川のした仕事が成功したのだと後に言われれば徳川家の名誉ではないか。国の利益ではないか。いざれ土蔵つき売家になればいい』と造船所を売家につける土蔵にたとえて笑って言ったといひます。「幕府のためだけに造るのではないという江戸っ子のシャレでしょう」と老師。

明治四十五年、東郷平八郎は小栗の遺族を招いて「日本海海戦の勝利は小栗さんが横須賀造船所を残してくれたおかげ」と礼を述べています。このことを受けて村上老師はこう言います。

「残した土蔵が役に立ったのです。もし敗けていれば、日本海はロシアの海になり、いま

今回の特集にご登場頂いた村上泰賢師のご著書『小栗上野介—忘れられた悲劇の幕臣』(平凡社新書)を5名の方にプレゼントいたします。仏教企画(下記「お便り募集」送り先)まで、ご希望の書名・お名前・郵便番号・ご住所・電話番号・プレゼント名を明記のうえハガキでご応募ください。 **2025年5月末必着**



本誌170(秋)号のプレゼント、『上條陽子とガザの画家たち 希望へ…』は、次の方々が当選されました。

埼玉県/黛一子様 神奈川県/西岡則昌様
 静岡県/橋本正己様 佐賀県/池内淳子様
 長崎県/吉田房江様



東善寺に保管されている
小栗上野介の写像

東善寺

〒370-3401 群馬県高崎市倉淵町権田169
<http://tozenji.com>

取材執筆・撮影 | 終 憩(ひいらぎ・いこい)

1964年生まれ。筑波大学卒業後、出版社数社を経て独立。ライター兼編集者として、書籍・雑誌の制作に携わっている。

身近な人との心温まるふれあいや本誌への感想、仏教についての質問などを600字以内でお寄せください。Eメールでも受け付けております。

送り先.....
 〒252-0116
 神奈川県相模原市緑区城山4-2-5
 仏教企画編集部
 Eメールアドレス.....
fujiki@water.ocn.ne.jp

夏の暑い日は早朝墓そうじをすることにしている私。父母の介護と仕事を言い訳に大草にびっくりする夏草。まるで草の種をまいたよう。中腰よりも正座をして草をとる。祖父母に語りながら、父に語りながら、母に語りながら、妻に語りながら、子供に語りながら、孫に語りながら、お供え物はないのかな。それぞれ視線を感じる五時三十分でした。沢山汗もかきました。さわやかな一日のはじまりでした。祖父母に感謝。そして一羽二匹に感謝。またよろしくね、と思いました。

島根県 吉田恵様

す。国を想い、未来を想う。小栗の先進的な仕事と武士としての生き様にそのヒントが潜んでいるかもしれません。

政治不信が続き、日本の未来は不透明です。自分の任務を終えても、その後の国が栄えるし、くみを構想するような志の高いリーダーの出現が待ち望まれます。

訪日外国人などの日本文化に対する関心の強さや、テレビドラマなどで小栗を知って東善寺まで足を運ぶ人々がいることから、日本人の精神性の豊かさを再発見する機会が訪れつつあることがうかがえます。

いまの世の中に足りないのは、真の武士の精神ではないでしょうか。日本人の中には昔からの武士の精神が深いところで脈々と息づいているはずで、

訪日外国人などの日本文化に対する関心の強さや、テレビドラマなどで小栗を知って東善寺まで足を運ぶ人々がいることから、日本人の精神性の豊かさを再発見する機会が訪れつつあることがうかがえます。

『……たとえ国が減びても、この身が倒れるまで公事に尽くすのが、真の武士である』とも言っています。常に当事者意識を持ってに当たると「真の武士」を目指していた人ということです。』



毎日書道

書家 松山妍流

無垢清浄光
慧日破諸闇
能伏災風火
普明照世間

けがれなく
清浄の光
智慧に溢れた光は
諸々の暗闇を破り
災いの風火を
見事に吹き消し
世界中を明らかに
お照らしになるのです

丸山劫外

無垢清浄光
慧日破諸闇
能伏災風火
普明照世間

ご家族のみなさまのご応募をお待ちしております

作品集

お手本を参考に、作品を半紙(横向、お名前は左側)に書いてご応募ください。(無料)ご応募の中から優秀な作品を選び、年に1度誌上で発表し、記念品を贈呈します。住所、氏名、電話番号を明記して作品をどしどしお寄せください。169(夏号)~172号(今号)の審査発表は175号(冬号)にて行います。

送り先 〒252-0116 神奈川県相模原市緑区城山4-2-5 仏教企画 電話042-703-8641

締切 2025年5月末日(当日消印有効)

松山妍流先生は、埼玉県所沢市吉祥院住職丸山劫外師のお姉さんで書家(佐藤柯流に師事)です。

『曹洞禅グラフ』 募集俳句選

選・尾崎竹詩

群青の海に向ひて銀杏立つ

広島県 小畑宜之

一幅の絵画をみるような景観が目には浮かびます。瀬戸内海の青い海を背景に大きな銀杏の樹が聳え立っているのです。真っ黄色に色づいた銀杏の樹は今にも散りそうな気配です。きつと晴れ渡った日に風もなく静かに立っているのでしょうか。何か大きな音を立てると一斉に飛び立っていきそうな景色に心奪われたのです。色彩の対比を見事に作品に仕上げました。

初電話淋しくないと嘘言って

佐賀県 池内淳子

お正月に遠くに住む子供から新年のあいさつとして電話が掛かってきたのでしょうか。最近ではテレビ電話で年賀の挨拶をされる方も多くなってきたと聞いています。明るく元気のよい子供やお孫さんの声を聴くと会いたくなくってくるのは当然です。しかし多忙な相手の身の上を思いやっている人情がこの句の眼目です。

風や道連れとなり里帰り

神奈川県 田中恵一

この句は少し意味が伝わりにくいところがあります。それは「道連れ」となったのは何か想像しにくいのが原因です。私は「風」だと思いました。そうすると「風を道連れにして里帰り」とすれば意味がはつきりします。

老鶯に歩幅小さく天あおぐ

埼玉県 西岡備中

「老鶯」は夏の鶯のこと。春先に里山で鳴いていた鶯も夏になると涼しいところを求めて高い山に移っているのです。作者は急な山坂を登ってきたら美しい鶯の鳴き声に出会ったのです。「老鶯や」と切ってみたらより感激が大きくなります。

選者録

菜の花やここは何町何丁目

尾崎竹詩

作品募集

みなさまのご応募をお待ちしております(お一人3作品まで)

お申し込み方法

作品、住所、氏名、電話番号を明記して下記のいずれかにてお寄せください。

- はがき、封書で投稿
送り先・〒252-0116
相模原市緑区城山4-2-5
仏教企画
『曹洞禅グラフ』俳句募集係宛
- Eメールで投稿
fujiki@water.ocn.ne.jp

締切 2025年5月末日(当日消印有効)

- ご応募の中から優秀な作品を選び、誌上にて発表する予定です。
- 更に年に1回冬号(新年号)にて年間優秀作品を選出し、記念品を贈呈します。



貴重な記録や資料を見せてくれた
村上さん

自分は生かされている」。

「船乗りだった四十年間、

何度も死にそうな経験をしました。

海の上にいる時は、

神様や仏様しか頼れない時があるんです」

村上治憲さんは、

漁船員としての海上生活を経て、

八十代となった現在も、

仏教の教えに支えられていると語る。

宮城県気仙沼市を訪ねた。

こころ穏やかな日々
手を合わせ

気仙沼駅けせんぬまから国道四五号線を通り約二十分。唐桑からくわトンネルから先が、同県の最北東端に位置する旧唐桑町（現気仙沼市）だ。



40年間の船乗り生活 「生かされている」 と感じたとき

村上さんの一日は、少し高台にある自宅の二階から日の出を眺めることから始まる。「あの杉林の、ちょうど隙間から太陽が眩しく光り始めるんです。素晴らしい光景ですよ」

東日本大震災では、同じ窓から見下ろす海面が大きく上昇し、湾内に集中した津波は周辺の住宅を飲み込んでしまった。「私はちょうど孫を迎えに出っていたので、そのまま息子家族の家で二晩過ごしてから自宅に戻りました。妻も外出先で避難でき、この自宅も無事でした。しかし、まさかあんな波が来るとは。生まれ育った場所ですけど、びっくりです」

震災後には防潮堤が建ち、村上さんが幼少期から眺めてきた海の景色は異なるものになった。朝陽を拝み、坐禅し、妻の貞子まことさんとの時間を大切に過ごす日々。車で菩提寺の前を通る時は、一時停止をして感謝の言葉を唱える、というマイルールもある。日々、新聞や書籍からの学びも欠かさない。祖父から引



「仏教の学びはいつまでも尽きません」と村上さんは語る

き継いだ本もあるという豊かな蔵書には、仏教だけでなく、自然科学、哲学、歴史、地域文化、写真集、小説など、さまざまなテーマの本が並んでいた。「気になったことがあると、切り取ったり書き写したりしています」

大量のノートには、その日の出来事に加えて、日の出・日の入りの時間、月や星など天体の動きといった記録が細やかに、しかし分かりやすくきれいな万年筆の文字で記録されていた。「昔からシケの時には自室でノートを付けていた習慣です」

精神を鍛えた海の世界

シケとは、悪天候などで海の仕事ができないこと。唐桑は遠洋漁業の歴史が長く、多くの男性たちが船に乗り、海で働いてきた。村上さんの父親は漁師ではなかったが、「私は水産高校に入らなかったことをきっかけに、船乗りになりました」と、

どこか運命付けられていたかのように、

十五歳から船乗り人生を歩み始めた。遠洋マグロ船に約十年、その後は当時主流になり始めたトロール船(遠洋底ひき網漁業)の機関長へとキャリアを伸ばした。時代は二〇〇海里の規制前であり、バブル真っ盛り。各メーカーが技術開発に努め、新鋭の最新船が次々に造船されていた。

各国の船が競うように出港していたと言う。「スケソウダラの漁期は十二月から四月まで。カムチャツカ半島近海は旧ソ連や韓国の船との争奪戦です。最盛期はたった一日で船が満杯になるほど獲れました」話をシケに戻すと「シケだと網が下ろせず仕事にならないんです。機関長として自室が与え



村上さんの菩提寺である地福寺

たまたま開いた頁には、昭和五十三年冬、ベーリング海にいたことが記されていた。「もちろん辛いこともたくさんありましたよ。なんせ北の海は、骨の芯まで凍るような厳寒ですから。船が揺れて、吐き気や頭痛、腰

痛といった影響も出ます。でも『男の世界』では弱音も吐けないんですよ」

七つの海で実感した「生かされている」

事故や沈没など、行方不明や事故死を見聞きすることもなくなかった。村上さん自身、一年目に早くも座礁

事故を経験した。「夜中に慌ててデ

ツキへ逃げ出し、暗闇のなか、いつ沈むかわからない船の上で十時間も救助を待ち、やっと一人ずつ全員が助け出された直後、目の前で船が真っ二つになっただけです。本当に怖かったですね」

以来、七つの海で四十年近く働い

た村上さんは、人智を超えたものに感謝を積み重ねてきた。「八歳の時に他界した母の、たった一枚だけ残されていた写真を大切に持っていたんですが、座礁した船と一緒に沈んでしまったんです。体ひとつとはいえず自分は助けられて、まるで母が身代わりになってくれたように感じました。当時の記録を読んでいると、よく生きて務めきつたなあと思うんですよ」

村上さんは菩提寺である地福寺に頻繁に顔を出す。石碑を磨いたり、祭典時には実行委員のひとりとして地域を回ったりと、出来ることに努めている。片山康春住職は「生まれた時からこのお寺とご縁があるような方。震災やコロナ禍を経て、人口が減ったり、人との関わり方も変わってきた今、村上さんのような熱心な方はありがたい存在です」と教えてくれた。

取材執筆・撮影 | やなぎさわ まどか
ライター、編集、翻訳マネジメント。
食と農と社会の課題をテーマに執筆する。株式会社 Two Doors 代表。



東日本大震災およびそれ以前の津波被害の碑が三陸の歴史を物語る

涅槃図——。娑羅双樹の樹々に囲まれて亡くなったお釈迦様を、弟子や菩薩、天女、そして動植物までが取り囲み、嘆き悲しんでいる様を描いた仏画のこと。諸行無常、生者必滅。この世の全ては変化を伴い、生きとし生けるものは必ずお釈迦さまのように亡くなるものであることが表現されています。

佐賀県佐賀市。曹洞宗の古刹である高伝寺で管理されているのは、日本最大級の大涅槃図です。広げれば、縦に十五・二メートル、横は六メートル。五階建てビルの高さにもなる涅槃図が収められた箱には、宝永三（一七〇六）年の製作であることが記されていました。現在では毎年四月、釈迦堂御開扉法要に合わせ約一カ月間のみ公開される、佐賀市の重要文化財です。高閑者廣憲住職は二〇〇八年、長い歴史のなかで大きく傷んだ大涅槃図の修復を決意し、約二年の歳月と心血を注ぎました。改めて、大涅槃図の存在についてお聞きしました。

三十年ほど前、初めて高伝寺に来た時には、大涅槃図の中心がばつさりと裂け、皺もたくさんありました。大きい上に材質は和紙。保管用の芯や箱も古く、扱いくわかつたことが要因の一つだと思います。それでも毎年公開していましたが、傷みの多さから、いつか消えてしまうもののように感じていた方も少なくなかったと思います。しかし私の中には「いつか修復したい」という願望がずっとありました。

高伝寺はもともと、戦国時代から九州の最大勢力だった鍋島家の菩提寺でした。佐賀藩祖である鍋島直茂の父親・清房が建てたお寺です。三十五万石を超える鍋島藩は、武士の心得や思想をまとめた書物『葉隠』を製作したことで知られていますが、『葉隠』を書いた場所も、高伝寺の敷地内にある華藏庵という庵でした。

蘇った大涅槃図



再び灯された覚悟

独自性に秘めた三つの思想

『葉隠』は口述された書物で、教えを語ったのは当時の高伝寺住職であった、湛然たんねん・梁重りやうじゆう和尚でした。同じく佐賀には圓蔵院というお寺があるので、ある時、圓蔵院の住職が、お寺の昇格を藩主に直訴するという、当時では考えられない大事件が起きました。非礼を許さなかった鍋島家藩主二代目・光茂は、周囲の説得も聞かず、その住職を斬首してしまふんです。

光茂に対して憤った湛然和尚は、抗議の意味を込めて高伝寺を出て、佐賀から去ろうとしました。すぐに藩士に捉えられるも、自らをも斬首せよと強い抵抗を続けます。しかし和尚を手放しては威厳に関わる光茂は、必死に交渉を重ねました。結果、和尚は高伝寺の住職は辞めるも、お寺に留まることとして折り合いが付き、和尚のために建てられたのが、華蔵庵です。『葉隠』に記された「武士道といふは死ぬことと見つけたり」のくだりは武士の思想ですが、和尚自身がまさに覚悟を持って生きていた方だったのだと思います。光茂の死後、三代目・綱重は、光茂を供養する手段のひとつとして、大涅槃図の制作を発願したそうです。



本堂に展示された「大涅槃図」©佐賀市



レプリカにて三つの禅の思想を説明する高閑者（タカガワ）住職

高伝寺の大涅槃図は、京都・東福寺にある大涅槃図を模写して作られました。東福寺は当初、模写することをなかなか許可せず、京都在住の絵師らが協力したと『葉隠』に記されています。

綱重は、図案や寸法などもそのまま模写するように命じたそうですが、三年を掛けて完成した大涅槃図は、随所に独自性が見られるものになりました。もしかしたら、オリジナルを超える涅槃図にしたいという願望もあったのではないのでしょうか。見比べてみると、服装や表情などの描写がより日本的であったり、一般的には涅槃図に描かれることが少ない猫もお釈迦さまを囲んでいます。

大きさも、縦に三メートルほど大きくなっています。なぜ大きくしたのか。これは私の想像ですが、仏教的な意味合いが強まるように工夫した結果ではないかと考えています。大涅槃図をじっくりと見つめていると、中央部の約三分の一を使って、お釈迦様を中心とした涅槃の思想が描かれていることがわかります。その上の三分の一は、主に木々や雲の絵。これは山川草木悉皆成仏、自然界のあらゆる

ものに仏様の心が通うという思想です。さらに下の三分の一には生き物が描かれており、生きとし生けるものは生まれながらにして仏になれる資質をもつ、一切衆生悉有仏性の思想だと言えます。つまりこの一枚の絵で、三つの禅の思想を等しく表現するためにこの大きさにしたのではないか。そう思えてなりません。

鍋島藩は幕府と近い存在であったため、東福寺に対して模写を許可させたり、模写であっても独自性を出して思想を込めたりできたのではないのでしょうか。個人名はないものの、腕のいい絵師が描いたでしょうし、製作費用もかなり掛かったはず。何かしら幕府の後ろ盾があったとしても不思議ではありません。

明治時代になり廃仏毀釈はいぶつぎしゃくが起ると、最後の藩主だった鍋島直大なむらうは、鍋島家と、かつての主君だった竜造家、両家の墓を各地から集めて高伝寺に移設しました。今も、本堂の裏手にある千八百坪の御墓所には、東側に竜造家、西側に鍋島家の墓石が並んでいます。お墓だけではなく、キリシタン灯籠も一緒に置かれています。墓石を移す費用も相当なものだったと思われるので、鍋島家もある種の覚悟をもって新しい時代を迎えたのでしょうか。



「大涅槃図」全体図。紙本彩色で縦15.2メートル、横6メートルもある巨大な画幅

三百年ぶり、修復への思い

おそらく廃仏毀釈までは、大涅槃図も大事に扱われていたと思うんです。しかしその後、大きな故の扱いの難しさか、雑に扱われるようになってしまったのでしょうか。そして、私が高伝寺の住職になったところは相当に傷んでいました。

修復については、市民による実行委員会と佐賀市にご協力をいただき、二〇〇八年から始まりました。二年後の二〇一〇年、費用にして二千四百万円を掛けて、素晴らしい大涅槃図が蘇りました。まさに後世に残すべき歴史的価値だと実感しています。修復を終えた

図をそのままにしていいたわけがない。そう思いました。費用の半分ほどは、叔母の遺産であった私財を費やしています。

自らに灯す禅の教え

実は初めて高伝寺に挨拶をしに来た際、先客の僧侶から「ここは十人いないとやっていけないお寺」と言われたことがありました。



修復によって保管箱も十分な大きさにアップデートされた

二〇一〇年には、九州国立博物館で大涅槃図の全体を初公開することができました。三〇〇余年を経て一枚の状態に広げて見ていただくことは、ひとつの大きな達成感でもあります。

現在は、文化財保護法に基づく管理を行っているため、掲げるだけでも六人の人手を要する大仕事です。毎年、一時間ほど掛けて作業しています。ただ本堂では全体を広げることが叶わないため、公開するのは主にお釈迦さまが横たわる中央部分です。

なぜこれほどの労力を掛けてまでこの涅槃図を修復したのかと言えば、それは僧侶として、そして人としての、本能です。何もしないでいたら高伝寺でただ朽ちてしまう大涅槃長い歴史を誇る広大な敷地と、「佐賀の春は高伝寺の梅から」とお褒めいただくほどに知られている、七〇〇を超える梅の木の管理。いずれも重要な住職の責務です。実際にはずっとひとりで勤めを果たしながら、かつてもたったその言葉を忘れたことは一日たりともありませんでした。

年月を経た今だから思うことは、十人を要する作務の多さも、大涅槃図の保護管理も、自分自身がどれほどの覚悟をもち、命懸けで取り組めるのか。私の覚悟が問われていたのだと思います。将来のことはわかりませんが、住職という仕事を務めるためには、そのくらい強い気持ちを持つ必要があったということなのでしょう。僧侶を目指した時から今まで、仏様の言葉は自分の在り方に通じていたのだと感じています。

また、多くの方々と高伝寺の素晴らしさを共有したい、ありのままの高伝寺を見ていただきたいという気持ちがあります。二月中旬からの梅の季節、四月の大涅槃図、もちろん毎週の坐禅会にも、皆さんにお越しいただいたら嬉しいのです。

取材執筆・撮影 やなぎさわ まどか
ライター、編集、翻訳マネジメント。食と農と社会の課題をテーマに執筆する。株式会社 Two Doors 代表。

蘇った大涅槃図
再び灯された覚悟

やなぎさわまどか

18

40年間の船乗り生活
「生かされている」と感じたとき

やなぎさわまどか

14

募集俳句選

尾崎竹詩

13

毎日書道

松山妍流

12

特集 小栗上野介の真実
東善寺・村上泰賢老師をたずねて

柗憩

4

痛みを分かち合い支え合う場

島菌進

2

戦争という仕事

内山節 著



発行… 信濃毎日新聞社
出版年… 2006年
A5判並製 / 334頁
定価… 1,980円(税込)

目次	
第1章	戦争という仕事
第2章	政治という仕事
第3章	経済という仕事
第4章	自然に支えられた仕事
第5章	消費と仕事
	他

本書は2004年1月から2005年12月までの2年間、信濃毎日新聞で掲載されたものである。その第1章に私は、本書の書名でもある『戦争という仕事』をおいた。現代の戦争を人間たちの寒々とした仕事のひとつとしてとらえたとき、そこから何がみえてくるのかから今日の仕事について語りはじめようと思った。戦争という仕事がある現在の私たちの仕事の根本的な何かを象徴しているのなら、私たちはどんな時代性のなかで生きているのか。

書店にてお求めください

表紙画「道端の仏様」／平川恒太

野生のセリを探しに近所の田んぼに出かけた時、綺麗に咲くホトケノザを見つけた。丸く広がる葉が仏像を乗せる蓮華の台座に似ていて、花の一つ一つがスツと蓮華座に立つ仏様に見える。以前見た聖観音菩薩立像を思い出した。日本画家、川端龍子の《花摘雲》は、天女が風と共に春の訪れを知らせるような作品で、ポッティチェリの名作《春》の日本版といったところか。今回の表紙絵にはより身近な春の訪れの喜びと、身近な仏様との関わりを描きたいと思った。今年の春はホトケノザを見かけたらよく観察してみたい。